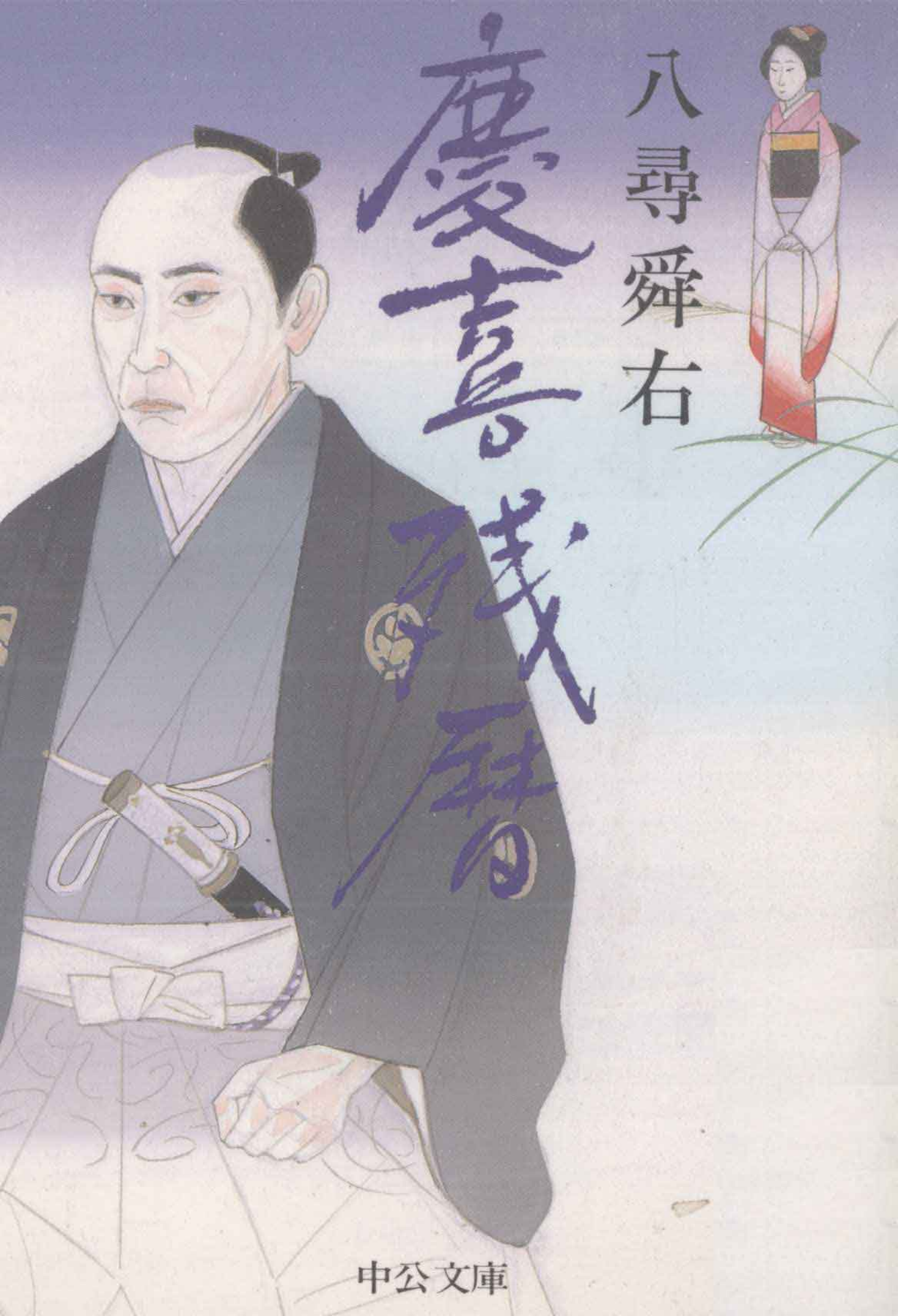

# 慶喜残影

八尋舜右

中公文庫

中公文庫

# 慶喜残暦（けいきざんれき）

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷
1997年9月18日発行

著者　八尋舜右（やひろしゅんすけ）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Shunsuke Yahiro

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202938-4　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

江苏工业学院图书馆
藏书章

中華文庫

# 慶喜殘曆

八尋舜右

中央公論社

# 慶喜残暦　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

真田幸隆　黎明の六連銭　9
徳川家康　影武者願人坊　57
織田信長　伊賀の忍敵　107
松永弾正　火の器　152
竹中半兵衛　生涯一軍師にて候　187
諸岡一羽　秘太刀一羽流異聞　231

内藤忠勝　狂気にあらず　275
上杉鷹山　火車の華　301
坂本龍馬　賊子の勲章　344
徳川慶喜　慶喜残暦　371
解説　高橋千劔破　401

# 慶喜残暦

# 真田幸隆　黎明の六連銭

## （一）

「上がったようだな」
足をとめて、主は空をみあげた。
「まこと。先刻までのはげしい降りが、うそのようでござります」
うなずきながら横手の渓谷に眼をやった供の小者が、
「おや、虹が……」
ささくれた指をつきだした。
天空を斧で断ちわったように、太く鮮やかな虹が深い谷底にむかって切れおちているのがみえる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

主従はゆっくりと蓑笠を脱いだ。
「温泉にでもつかっていくか」
「けっこうでございますな」
微笑をかわすと、主従はふたたび足をはやめた。
背後で、がさりと音がした。
主従の足がとまり、そのまま耳をすます。かすかに獣に似たうめき声がきこえた。
細い山路の両脇は、一面うっすらと紅葉した楢や樺の木立である。
「熊でも罠にかかりましたかな」
小者が、腰を曲げ木立の奥を透かしみた。
「熊ならもっと吠えたてよう」
「さすれば猪……」
「いな。獣ではあるまい。人だ」
主は、確信ありげにいった。
「人でありますか。みてまいりましょう」
野菊の花を草鞋でふみしだき、小者は身軽に木立のなかに駆けこんだ。
「気をつけてまいれよ」

その背に声をかけると、主は路傍にむかって野袴のまえをひらき、悠々と尿を放ちはじめた。

上州は上後閑の山中である。脚下から岩を噛んで馳せくだる九十九川の瀬音がひびいてくる。

「おやかたっ」

やがて、十間ほどの高みから、小者のよびかける甲高い声がきこえた。

「みつけたか」

「たしかに、人が罠にかかっております」

「やはりな……助けてやるがよい」

主は屈託なげにこたえた。

「それが、胡乱の者にござります。直々に、ご検分くだされ」

「わかった」

かるく身ぶるいしながら野袴のまえを整えおえると、主は小者の声のしたほうにゆったりと登っていった。

緊張した面持ちで小者は主人を迎えた。その足もとに、たしかに男が一人、右足を獣挟みにとらえられて苦痛に呻いている。

「草のようにみゆるが……」
主は、かがみこみながら男に問いかけた。
草とは草の者、つまり忍びの者のことだ。
「さよう。草のような者にござる」
激痛に顔をしかめながら、罠にとらえられた男はわるびれるふうもなくいらえた。
「ふむ。ドジな草だな。村上の手の者か」
男は、それには直接こたえず、
「みてのとおりの隻眼ゆえ、足もとが狂いもうしたわい」
不敵にいってのけた。
みれば、たしかに片目がつぶれている。明らかに矢傷により失明したものとみてとれた。
「独眼の身で、不敵にも、わしをつけてきたか」
「さよう」
「ただの草ともおもえぬが、いずれの手の者か。素直に明かせば助けてやらぬでもない」
「まこと、お助けくださるか」
「武士に二言はない」
「ならば、もうしあげる。甲斐よりまいった」

「なるほど、武田の草か」
「正しくは足軽大将にござる。山本勘助ともうす」
「知らぬ名だな」
「知らぬが当然。新参者でありますゆえ」
「ふむ、その新参の足軽大将が、なにゆえ、わしをつけてきた。真田幸隆と知ってのうえか」
「むろん」
「刺せるとおもうてか」
「刺すつもりではござらぬ。ご人品をたしかめにまいった」
「たしかめて、どうする」
「わが眼力にかなえば、武田に仕官をおすすめする所存」
「不遜なものいいをするものよ。わしを、怨敵武田に誘降しようとか」
「乱世でござる」
「怨みを捨てよと、わしに説教するつもりか」
「いまは、その余裕とてござらぬ。とりあえず罠からはずしてくだされ」
勘助は重い獣挟みに挟まれた右足をさしだした。

「約束ははたさねばなるまいの。庄兵衛、はずしてやれ」
幸隆は苦笑しながら小者にむかって顎をしゃくった。
「よろしいので、ありますか」
庄兵衛は、なおも不審のとけぬ眼のいろで幸隆をうかがいみたが、
「かまわぬ」
幸隆は余裕のある微笑をみせた。
頭上で夫婦(めおと)の雉が鳴いている。

（二）

真田氏は、古くから信濃国小県(ちいさがた)郡真田を本貫にしていた土豪の一つである。
平安のころから、小県、佐久一帯に勢威を張っていた滋野一族が、やがて海野(うんの)、禰津(ねず)、望月の三家にわかれた。真田家は海野家の分流で、ときに応じて在所の真田を名乗りとしたが、幸隆の父頼昌のころから、正式に真田姓を称するようになった。
この一帯には、古くから信濃国府の牧があった。真田一族も、あるいは、この国営牧場をとりしきる牧童頭のようなものだったのかもしれない。とまれ、幸隆のころには、四阿(あずまや)

山麓、神川の畔の真田郷に城館をかまえ、北からの村上氏、西からの諏訪氏、そして南から侵入する武田氏らに必死に対抗していた。

天文十年（一五四一）、五月、海野平は三方から攻めこんだ数千余の軍勢に埋めつくされた。甲斐の武田信虎が、信濃の村上義清、諏訪頼重と談合し、海野平の切りとりにでてきたのだ。

旧滋野一族は、千曲、神川ぞいに陣を張り、おりからの豪雨をついて得意の騎馬を駆って果敢に邀撃した。しかし、多勢に無勢、敵の射放つ矢が車軸を下すごとく疾駆する味方の騎馬兵に降りそそぎ、たちまち海野本家の嫡男左近太夫幸義が全身篠のようになって討ち死にした。

暗い中天に雷鳴がどよもし、ときおり戦野に火柱が立った。徒歩兵は槍を手に棒杭のように立ちすくみ、いちようにかちかちと歯を鳴らした。

「これまでか」

矢沢頼綱がまず眉根をよせて降伏のけはいをみせると、

「ひとまず、降るか」

同族の禰津元直も馬を下り、蹌踉として敵の本陣にむかった。

「ちっ、根性なしめがっ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com